

図書新聞 2003年5月24日

“花嫁事件”の全資料を網羅

日米比較文化論として今日でも問いを投げ続ける

ギブソン松井佳子

藤澤全、梅本順子 編

田村直臣日本の花嫁米国の婦人資料集

A5版 384頁 本体 8500円 大空社 ISBN:4-283-00215-1

今世界は混沌としている。皮肉にも冷戦構造があった時代には、米ソは二分化されたイデオロギーにより各々が均質で単色な存在として競合していたがゆえにパワーポリティクスも理念として可視化されていた。しかしその冷戦構造の崩壊によりアメリカは対立物をなくし、理念という支柱にゆるみが生じ、国内のさまざまな領域における複雑な亀裂や多様性が浮上してきた感がある。建国以来アメリカはピューリタニズムに依拠する神政政治（政教一致）と合理主義（科学主義）が雁行する形で共存する国である。世界のグローバル化を率いる一方でアメリカの一極支配は徐々に破綻現象を見せ始めている。良きにつけ悪きにつけ非対称な日米関係を生命線としてアメリカ戦略への依存を続けてきた日本だが、これまでに本当にアメリカという国を理解したことがあったのだろうか。

本書の著者田村直臣（1958 - 1934）はキリスト教の牧師 / 教師として明治維新のダイナミックな社会のうねりの只中で、1882年から1886年までのアメリカ留学の体験をもとにして日米両国の「女性の生き方」を取り上げ、比較文化的視座を用いて2冊の本を出版。日本語で書かれ日本で出版されたのは『米国の婦人』（1889年）。その後田村は英語でThe Japanese Bride（1893）を書いてアメリカで出版。ところがこの後者の本を日本語に翻訳して日本で出版しようとしたところ、内務省から発売禁止処分を受けると共に日本基督協会から教職剥奪が言い渡されることになる。いわゆる「花嫁事件」である。この2つのテキストを抱き合わせの対本として復刻したのが本書であるが、それに加え参考資料が充実していてThe Japanese Brideの全訳文『日本の花嫁』、「花嫁事件」メディア関連資料、「田村直臣略年譜」と「解説」が収められていて、ユーザーフレンドリーである。

ちなみに田村が見聞きした19世紀末のアメリカは空前の繁栄の時期を迎えキリスト教的理想主義にもとづく家族のユートピア思想が広がりつつあった。『米国の婦人』の著者自身の「序」で明らかかなように、この本の目的は腐敗の様相をみせている日本の男女交際のあり方をキリスト教の倫理観で救済しようとするものである。アメリカの家族をキリスト教の「神の国」の再現と捉え、田村は絶賛する。それに比べて日本は...という論理の展開にな

るのだが、これはいわゆる Catch-Up 精神の表れで、近代化されていない日本に劣等感を抱く態度といえよう。正しい家族は神道でも儒教でも仏教でもだめでどうしてもキリスト教でなければならないと主張する田村。しかしここでの救いは田村の文体である。論し口調ではなくユーモア感覚溢れるエッセイで闊達な清々しさが感じられ、時代的制約はあるにしても理屈抜きに面白い。日本の見合いによる結婚制度よりも、個人の主観によるロマンティック・ラブにもとづくアメリカの男女交際や結婚をより優れたものと判断しているが、1 世紀余りたった今のアメリカの家族の崩壊現象や離婚率の上昇をみると、ロマンティック・ラブと結婚を等号で結びつけることで抑圧されたり排除されてしまう何かを真剣に考えてみる必要があるではなかろうか。『日本の花嫁』では、「愛」によって神聖な絆が保証されるアメリカの結婚とは異なり、日本の結婚制度は求愛プロセスを経ずに専ら家系存続のためになされる社会的慣習であると非難して、日本女性はもっと教育を受けて会話能力のある主体性のある存在になるべきだと結論づける。だがこのような個人主義的思考回路への疑惑が最近の日本でもかなり提出され、西欧近代の価値観の根本的再検証が要請されていることを鑑みると、この 100 年あまりの歴史的時間の流れをゆっくりと自己に引き寄せながら本書に収められたテキストに、アメリカ評価、アメリカ相対化の視点を混入しながら向き合うのも 1 つの有意義な読み方ではないかと思われる。いずれにせよ日米比較文化論、アメリカ研究、ジェンダー論、キリスト教学といった領域に興味のある方々は是非この資料集に目を通してもらいたい。(比較文学・批評理論)